

# 日 本 科 学 哲 学 会

第 46 回 (2013 年度) 大会

研 究 発 表

要 旨

11 月 23 日 (土)・24 日 (日)

法 政 大 学

市ヶ谷キャンパス

# 目次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 11月23日(土)A会場(S405教室)・・・・・・・・・・   | 1  |
| 11月23日(土)B会場(S406教室)・・・・・・・・・・   | 5  |
| 11月23日(土)C会場(S407教室)・・・・・・・・・・   | 9  |
| 11月24日(日)午前A会場(F309教室)・・・・・・・・・・ | 12 |
| 11月24日(日)午前B会場(F101教室)・・・・・・・・・・ | 15 |
| 11月24日(日)午前C会場(F310教室)・・・・・・・・・・ | 19 |
| 11月24日(日)午前D会場(F311教室)・・・・・・・・・・ | 22 |
| 11月24日(日)午後A会場(F309教室)・・・・・・・・・・ | 25 |
| 11月24日(日)午後B会場(F101教室)・・・・・・・・・・ | 29 |
| 11月24日(日)午後C会場(F310教室)・・・・・・・・・・ | 32 |
| 11月24日(日)午後D会場(F311教室)・・・・・・・・・・ | 35 |

## 会場案内



※ 23 日は外豪校舎、24 日は富士見坂校舎で開催いたします。

11月23日(土)

《A会場》10:00-10:30

司会：鈴木 真(東京大学)

教室：S405

## サイエンス・コミュニケーションにおける論理性

村上 祐子

東北大学

サイエンス・コミュニケーションでは科学への気づきや科学の理解といった目的が強調され、科学的知識の提供に焦点が当たってきたが、実際のところ最重要の目的は民主主義社会における合意形成だ。そして、合意形成には情報提供だけでは不足であり、合意形成にいたる議論と手続が肝要である。科学にまつわる行動決定は、科学的知識を与えるのではなく、得られた科学的知識からどのように行動を決定するのか、判断するのか、といったスキルが必須だということとなる。しかも必要なのは個人の判断だけではなく、社会的合意に向けた判断なのだ。個人にとっての最善の選択と社会的に最善の選択は異なり、後者には弱者・少数者への配慮を含めた道徳的・倫理的考察や実施可能性の考慮が不可欠である。

合意形成に向けてとりわけ必要なのが、議論をかみ合わせるためのプロトコルであり、その分析は伝統的に哲学、中でも論理学がカバーする領域であった。一方で現在でも、論理だけでは実質的な議論や合意形成には不足だという反論がみられるが、だからといって、論理学や哲学が無駄だと結論づけるのは短絡である。三段論法だけが論理学の守備範囲ではない。これらの研究分野では、どこまでが論理的に可能なのか、その境界を見極めようとする。論理の限界を超えるには、相互知識から共有知識へのジャンプ、議論の相手への信頼形成へのジャンプが必要であり、このことはこれらの研究を通して理論的に定式化されている。

しかし実際の教育カリキュラム構成では、合意形成だけに着目すれば年齢を問わずに間違えてもよい安全な議論の場を提供するのが一つの方法だろう(デネット(2013))。だが背景となる論理学理論の知識を組み込もうとすれば相当の時間が必要であり、内容の精選が必要となる。

### 参考文献

Dennett(2013) Intuition Pumps and other critical thinking tools. W. W. Norton & Company

11月23日(土)

《A会場》10:30-11:00

司会：鈴木 真(東京大学)

教室：S405

### 「3.11以降」の科学技術論について

高村 夏輝

自由学園等非常勤講師

2011年3月11日の東日本大震災を原因とする福島第一原発の事故は、科学技術が社会にもたらす問題の大きさ、難しさを改めて認識させた。そこで得られた認識を元に、科学技術と社会とのかかわりを再考することは、科学哲学や科学技術社会論の研究者にとって一つの社会的責任であると言えるだろう。しかし、そのためになされた仕事の数は、問題の大きさに比べて意外に少ない。そして貴重な例外ともいべきいくつかの著作に対しても、私は大きな違和感を覚える。

たとえば次のような見解が示される。科学技術が惹き起こす問題は「トランスサイエンス」的であり、科学に問いかけることはできるが、科学では答えられない。それゆえ問題をどう解決するか、どのような科学技術を社会的に受け入れるかについて、科学者に任せきることはできない。そこで、科学者との「科学コミュニケーション」を通じて、一般市民が科学技術に関する意思決定に参加するべきである。

このような見解にはいくつか疑問を感じるが、科学技術ガバナンスについての一般論としては大筋では賛成したい。しかしこうした見解が、科学技術や学問的言説(科学だけではなく、科学哲学や科学技術論も含めて)が現実の社会の中にどのように埋め込まれ、どのように機能しているのかについての考察を欠いている点に大きな問題を感じる。たとえば先の見解を提示する論者は、政治的・経済的権力と科学技術の関わりについてほとんど述べないが、それを主題化しなくてよいのか。原発事故以降しきりと語られた「原子力ムラ」や「御用学者」という言葉は、そうした考察の必要性を迫るものではなかったのか。

今回の発表では、今述べたような疑問を基に、科学哲学や科学技術論の研究の方向について議論をしたいと思う。

11月23日(土)

《A会場》11:00 - 11:30

司 会: 横山 幹子 (筑波大学)

教 室: S405

## ロールズの合理的選択理論における確率と選好について

犬飼 渉

東京大学大学院総合文化研究科修士課程

本発表では次のことを示してジョン・ロールズの学説を支持する。すなわち、原初状態における契約当事者たちは、合理的に正義の二原理を選択する。

ロールズはこう論じる。契約当事者たちは、道徳原理を決めるための公正な初期状況すなわち原初状態に置かれており、個人的な利益にかんする情報を奪われている。この状態にあるとき、彼らはマキシミン・ルールにしたがい正義の二原理を選択する。

この原初状態からの議論にたいする批判は、以下のようなされう。正義の二原理にいたる推論を完遂させるためには、極端な確率割当を想定しなければならない。あるいは、極端なリスク回避性向・限界効用を想定しなければならない。これらの想定は受け入れがたいが、受け入れないならば契約当事者たちは不合理である。あるいは、そもそもそれらの想定自体が不合理である。

しかしながら、以下の手順を踏めば、修正を施しつつもロールズの学説を擁護することができる。まず、彼の学説において、合理的選択理論がカント的構成主義のうちに位置づけられる仕方を概観する。次に、契約当事者たちの選択の状況をゲーム形式によって表現する。さらに、確率割当の合理性および選好の合理性を規定する。その後、彼らの選択を詳説し、彼らの(仮想的)確率割当および選好が合理的であることを論証する。

11月23日(土)

《A会場》11:30-12:00

司会：横山 幹子(筑波大学)

教室：S405

## 福利(Well-Being)に関する哲学的懸念と心理学における主観的福利研究

鈴木 真

南山大学社会倫理研究所

近年、心理学では主観的福利の研究が盛んであり、哲学を含む他分野の注目も集めている。本発表では、心理学の研究に基づいて福利に関する哲学的懸念に対して回答できるかどうかを検討する。

福利に関する哲学的懸念の一つは、それが実在するかどうかという点である。哲学において福利とは、ある主体にとっての善、すなわちその主体の生をよくいかにせるものことである。こうした価値が実在するかどうか、というのはメタ倫理学における論争点であった。また福利の本性に関する哲学的対立は長年続いており、対立が解消する見込みが薄いかもしれないという懸念がある。このことも福利の実在に関する疑いの根拠となりうる。しかし心理学では、心理測定法による主観的福利の測定が行われている。単純に考えると、福利は測定できるのだから実在するのだ、という筋の実在論擁護の可能性はある。この議論の見込みは有望だろうか。

そもそも福利に関する哲学的懸念には、それが測定できるのかどうかという問題もあった。多くの規範理論では、採るべき選択肢は帰結、特に福利やその分配に対する影響により部分的には決まるとされている。ここでの前提は、福利への影響の大小が比較でき、足し引きができるということである。普通は、相異なる時点の福利への影響や別々の主体の福利に対する影響も比較したり足し引きしたりできるとみなされる。しかしこうした比較や足し引きを許すような仕方では福利が測定できるかどうか、ということが懸念として存在した。たとえば、現実の選択によって福利(効用)を基礎づける順序が決定される、という経済学でよくある考え方は、福利の個人間比較が困難になるというだけでなく、現実の選択が必要とされる完全性、推移性、独立性、連続性といった条件を満たさないという問題に直面する。福利の心理学は、こうした測定に対する懸念を乗り越え、規範理論にとっての福利の問題を解決できるだろうか。

11月23日(土)

《B会場》10:00 - 10:30

司 会: 西村 正秀 (滋賀大学)

教 室: S406

### 否定的認識的性質による幻覚の説明

横山 幹子

筑波大学図書館情報メディア系

「知覚についてどう考えたら、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持したまま、幻覚の存在をうまく説明できるのか」という問題の一端の考察が、本論の目的である。

本論で「知覚についてのわれわれの日常的な考え」として考察するのは、「知覚の対象は心から独立した対象である（知覚的経験の現象的特徴は心から独立した対象に依存している）」という考えである。その考えは、幻覚からの議論（知覚と主観的に区別できない幻覚を持つ・幻覚の対象は心から独立した対象ではない（知覚的経験の現象的特徴は心から独立した対象に依存していない）・主観的に区別できないならそれらは同じ種類の経験である・知覚の対象は心から独立した対象ではない（知覚的経験の現象的特徴は心から独立した対象に依存していない））により、脅かされる。それに対する一つの方策は、真正な知覚と幻覚の場合同じ表現が使われるということを読めたとて、そこに共通の基礎的な種類の何らかのものがあるという考えを否定し、知覚についての選言説をとることである。その場合は、知覚的経験をどのように説明するかが問題になる。Martinのような選言説論者は、知覚的経験の現象的特徴は、真正な知覚的経験の現象的特徴から反省によって区別されないということだけであるということによって、その問題に答えようとする。しかし、このような否定的認識的性質による説明に対しては、「認識的に洗練されていない主体の場合はどうなるのか」(犬問題)、「哲学的ゾンビの可能性をどう扱うのか」、「区別不可能性の非推移性の問題」、「幻覚についての肯定的認識的事実の問題」等の問題が指摘されている。

本論では、知覚的経験を否定的認識的性質によって説明することの問題点を検討することで、知覚の説明としての選言説の可能性について考察する。

(本研究は、JSPS 科研費 253700050002 の助成を受けたものです。)

11月23日(土)

《B会場》10:30-11:00

司会:西村 正秀(滋賀大学)

教室:S406

### カルナップの『世界の論理的構築』における「間主観性」

小川 雄

同志社大学 大学院 文学研究科 博士課程後期

本発表の目的は、カルナップ(Rudolf Carnap, 1891-1970)がその主著『世界の論理的構築』(Der logische Aufbau der Welt, 1928)のなかで展開している「合理的再構成」に照準を定めて、かれが提起している「間主観性」という概念の基底を露わにするとところにある。

カルナップの「合理的再構成」は、わたしたちにとって「なじみのある」概念を、集合と関係にかんする論理的な知見に立脚して所与としての体験を基に形成しなおすところみである(Der logische Aufbau der Welt, S.137, 1928)。すなわち、カルナップが描き出そうとしているのは、わたしたちが科学と日常生活のなかですで見知っている概念を直接的な体験から論理的に掴むための方途である。カルナップが強調しているように、「合理的再構成」の標的である科学的な知識には「間主観性」という特質がある(Der logische Aufbau der Welt, S.90, 1928)。というのも、科学的な知識の特徴は、私秘的な体験とは違って、その知識を異なる認識主観どうしで伝達でき、共有できるというところにあるからである。それにもかかわらず、「合理的再構成」には、当の主観的な体験と論理的な装置しかない。だから、カルナップが提起する「合理的再構成」の枠組みでは、科学的な知識の「間主観性」は、「わたしの体験」(ibid)だけで捕捉できなければならないはずである。しかし、そのような把握が、「間主観性」にかんして、はたして成立するのであろうか。

本発表は、まず、カルナップが、「合理的再構成」という装置を使って、物理学の概念と「わたしの体験」から出てくる諸感覚とをどのように結びつけているのか、かれの方略を精査する。つぎに、「構成的定義」(Der logische Aufbau der Welt, S.2, 1928)という着想と「物理学の世界」(Der logische Aufbau der Welt, S.180, 1928)の構築が「間主観性」の根幹をなしていることを論証して、「間主観性」を「所与の再配列」(Der logische Aufbau der Welt, S.200, 1928)として定位できる論拠を析出させる。こうした考究をとおして、さいごに、カルナップの認識論的な立ち位置を見定めたい。

11月23日(土)

《B会場》11:00-11:30

司会:村上 祐子(東北大学)

教室:S406

## 図による論理推論と認知

佐藤 有理

峯島宏次

東京大学・日本学術振興会 慶應義塾大学・専修大学

従来、哲学者による人間の思考や推論についての解明は、典型的には言語的な表現体系をモデルとして進められてきたと言えるだろう。しかし、地図や図表、あるいはより高度な図形を含めて、人間が様々な図的表現に依存する推論を行うことは、ごくありふれた事実である。認知科学の領域でしばしば指摘されるように、推論において有効に機能する図的表現については、表現と表現されるものとの間にある種の自然な対応関係が成り立ち、それにより具体的な図形操作による推論の代替が可能になると考えられる。地図のような空間表現の場合、この種の自然な対応が成り立つことは容易に分かるが、より抽象的な論理推論に用いられる表現の場合、論理推論が本来的に話題中立的で特定の対象領域をもたないものであることから、どのような対応が成り立つのかはそれほど自明ではなく、また図的表現が本当に論理推論に効果的であるのかについてさえ論争がある。

本研究では、自然な論理推論の典型例として量化文から成る三段論法推論と、それに対応する様々な図的表現に焦点を当て、図的表現が論理推論においてどのように機能するのかを考える。まず、自然言語意味論の知見を基に、三段論法推論のひとつの自然な定式化として、集合間の包含・排他関係に基づく推論を仮定する。図的表現の有効性は、量化文で意図された関係情報を顕在化し、それにより推論を具体的な図の操作に置き換えることができる点に存すると論じる。さらに認知心理学的実験を通してこの主張の補強を行う。

図的表現がある種の統語論的構造をもつことは従来の図形論理の研究で前提されてきたが、図的表現に固有の特徴(例えば、合成性の有無)については解明の余地が残されている。この点を含めて、以上の考察が、これまで多くの哲学者に共有されてきた思考や推論への言語中心的なアプローチにどのような点で再考を迫るのかについても議論したい。

11月23日(土)

《B会場》11:30-12:00

司会：村上 祐子(東北大学)

教室：S406

### 指示詞的概念の形成と概念主義

西村 正秀

滋賀大学経済学部

知覚内容(知覚経験の表象内容)が概念的であるのか否かという問題は知覚の哲学における中心問題の一つである。この問題に肯定的に答える立場は「概念主義」、否定的に答える立場は「非概念主義」と呼ばれる。非概念主義を擁護する議論の一つに学習論法がある。これはC. ピーコックなどが提出した議論で、簡単に言うと、「赤さ」などの概念の学習を説明するためには、非概念的な知覚内容を前提しないと悪循環あるいは偽なる生得主義に陥るというものである。この議論は近年、A. L. ロスキーズによって洗練化が図られた。ロスキーズは指示詞的概念に焦点を合わせる。指示詞的概念とは「あれ(that)」のような指示詞と類比的に捉えられた心的アイテムである。指示詞的概念の形成に焦点を合わせる戦略は他の哲学者にも見られるが、ロスキーズの議論に特徴的なのは、指示詞的概念の形成が非概念的内容を前提していることを、視覚的注意に関する経験科学的知見によって裏付けしている点にある。彼女によれば、指示詞的概念の形成にはトップ・ダウン型で対象ベースの焦点的な視覚的注意が必要であり、悪循環や生得主義を避けるためには、注意が向けられる対象として非概念的内容の存在が要請されるのである。

本発表の目的は、ロスキーズの議論が失敗していることを示した上で、指示詞的概念の獲得に関する概念主義的説明を提示することである。ロスキーズの議論は「前注意的な視覚状態が持つ内容は表象的かつ意識的である」という主張を前提している。この主張は経験科学に基づくものだが、その正しさについては幾つかの疑問が提示されている。本発表では、最初にこの問題点を確認する。その上で、非概念的内容の存在を持ち出さずに指示詞的概念の獲得を説明することが可能であることを、S. ケアリー、E. スペルキ、R. バイラージョンなどによる生得主義を手掛かりとして論じ擁護する。

11月23日(土)

《C会場》10:30-11:00

司会: 飯田 隆(日本大学)

教室: S407

### 科学革命は知識革命か? ~大出晁説の検討~

三富 照久  
中央大文学部

近年出版された、大出晁(慶応大名誉教授)の「知識革命の系譜学」、岩波、2004、において、大出晁氏は

- (O1) ガリレオの学問方法論は、基本的にパドヴァ学派のアリストテレス論証「復帰論」に基づいていた。その内容は、「事実による論証」により発見した確実な原因から、根拠による論証」によりもとの事実の証明を与えるものである。
- (O2) ガリレオは信頼性の乏しい「仮説」から出発して、その真偽を実験により確かめるとする「仮説演繹的検証論」としての学問観を有していなかった。と主張されている。

大出晁氏の著書では、「根拠の論証」から「事実の論証」の重視への変化が、「知識革命」として理解されている。この点は、機械論的(原子論的)自然観の成立を「科学革命」とする、通俗的科学史の理解と視点が異なっている。この考察では、「科学革命」における「知識革命」の意義を、科学哲学として検討する。

#### (参考)

アリストテレス「分析論後書」において、

(根拠の論証)

「近くにあるものは瞬かない」

「惑星は近くにある」(中項)

ゆえに「惑星は瞬かない」

↓

「近くにある」(中項)が

「惑星が瞬かない」ことの原因である。

(事実の論証)

「瞬かないものは近くにある」

「惑星は瞬かない」(←観察による事実)

ゆえに「惑星は近くにある」

↓

「瞬かない」(中項)

「近くにある」ことの原因ではない!

アリストテレスは、「惑星は近くにあるから瞬かない、のであって、瞬かないから近くにあるのではない」として(「分析論後書」13章)、「根拠の論証」を優位に見るが、16世紀パドヴァ学派のザヴァレラなどは、事実の論証→原因→根拠の論証、を「論証的復帰」として認めた。

11月23日(土)

《C会場》11:00 - 11:30

司会：飯田 隆(日本大学)

教室：S407

## 科学の偶然性と現実的制約

鈴木 秀憲

名古屋大学

われわれの科学の結果は偶然的なものだろうか、それとも不可避的なものだろうか。あるいは(別の言い方をすると)、われわれの科学と同等に成功的で、だが等値でないような科学があり得るのだろうか。この科学の偶然性の問題は、その問題の定式化の仕方も含め、科学哲学の一つの問いとしてさまざまな観点から(たとえば、デュエム-クワインテーゼや科学的实在論論争との関係などについて)議論されている。

本発表では、高エネルギー物理学実験における現実的制約の影響、すなわち高エネルギー物理学実験がいかに限られたリソース(資金、時間、マンパワー)やそのとき入手可能な技術のなかで営まれているかに注目し、そこから科学的発見の順序の違いによって、科学的知識体系が偶然的なものであり得ること(「科学的知識の非可換性」)を示す。

そして、科学の偶然性の問題が、その設定を現実的制約まで含めたものに定式化し直すことによって、現実的で実り豊かな一科学者と問題意識を共有可能で、科学がどのような内的・外的な影響関係によって動いているかというダイナミクスの解明につながり、実践的なリサーチポリシー研究に関係するような一問いになると論ずる。

11月23日(土)

《C会場》11:30 - 12:00

司会：飯田 隆(日本大学)

教室：S407

### 物理学の認識論的転回は可能か

杉尾 一

慶應義塾大学・日本学術振興会

近年、弱測定という量子測定が注目されている。これは、状態の収縮をほとんど引き起こすことなく量子系から値を得る測定だ。しかし、弱測定によって得られる値(弱値)が何を意味しているのかははっきりしていない。弱値の意味を明確にするためには、最も基礎的な概念、物理量と値についての概念分析が必要だろう。

量子論では物理量と値は概念的に区別される。例えば、ヒルベルト空間形式の量子論では、物理量は自己共役作用素として表され、それ自身は値を持たない。それでも物理量は、量子論においても古典論と同様に物理的対象の客観的属性とみなされている。このことは「電子がスピンを持つ」といった表現から読み取ることができる。

しかし、物理量は、物理的対象の客観的属性なのだろうか。測定器からなる集合を類別することによって得られる同値類として物理量を定義する場合、物理量を属性といった存在論的性質として解釈することは素朴すぎる。この定義にもとづけば、私たちによる測定という認識論的な意味合いが物理量に含意されるためだ。私たちは物理量概念について再考しなければならない。

次に、物理量の値について考えよう。値は、存在論的値と認識論的値の二つに大きく分類される。存在論的値とは、私たちとは独立に世界の側に存在する値のことだ。一方、認識論的値とは、実際の測定、あるいは測定の文脈を通して私たちが得る値のことだ。量子論では後者のみが許されるのに対し、古典論では両者とも許されている。しかし、古典論において存在論的値を認めてよいのだろうか。私たちが、認識論的値を存在論的値と思い込んでいるだけなのではないだろうか。

本発表では、物理量と値の概念分析を通して、弱値の新たな解釈を提示する。そして、この解釈を通して、物理学を存在論から切り離し、物理学が物理的対象を認識する行為を数学の言葉・構造を用いて組織化した認識の体系であることを明確にしたい。

11月24日(日)

《A会場》10:00 - 10:30

司会: 古田 智久 (日本大学)

教室: F309

## 志向性の論理による W. V. Quine の存在論的コミットメントの再考

野村 尚新

北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科／日本学術振興会特別研究員 DC1

本発表の目的は、分析哲学における存在論の端緒となった W. V. Quine の「何があるのかについて」(On What There Is, 1948) における非存在対象の扱いを新 Meinong 主義者の急先鋒である G. Priest の Towards Non-Being (2005) における志向性の論理を用いて洗練・深化させることである。

上記の論文で Quine はある人物がある文を真とするためには、彼 / 彼女が存在論的にコミットしなければならない対象を明らかにする方法を定式化した。要約すると次のようになる。存在論的コミットメントを明らかにしたい理論 (文の集合) を一階述語論理の論理式へ翻訳し、この論理式の変項の値に注目する。そして、この理論を受け入れる者はこの変項の値、すなわち、対象領域のそれぞれの要素の存在にコミットしなければならない。

現在では、この議論のそれぞれのステップが持つ問題点が明らかとなっているが、ここではそのような細部には関心を払わない。われわれがここで再考するのは、Quine の非存在対象の扱いである。なぜならば、Quine の基準に従うと、存在論的にコミットしない対象を含む文は全て偽になるからである。しかし、われわれは日常的に、非存在対象を含む文に真偽の判断を行っている。例えば、「ペガサスは馬である」は真で「ペガサスは豚である」は偽、とペガサスの存在にコミットせずにこれを含む文の真偽判断を行っているのである。

Quine の存在論的コミットメントの基準では非常に限定されており非存在対象や抽象的对象を全て排斥してしまう。その原因の 1 つは、Quine が 1 階述語論理に依拠していることにある。そこで、われわれは、Priest の志向性の論理から彼の基準を再検討し、非存在対象を含む文であってもわれわれの日常的な理解に反さないようにこの基準を受け入れることを目指す。

11月24日(日)

《A会場》10:30-11:00

司会: 古田 智久(日本大学)

教室: F309

### 時間論上の存在論的対立に適したメタ存在論

小山 虎

大阪大学

存在論は時間論において熱心に論じられている問題のひとつであり、中心的な立場が三つあることはよく知られている。すなわち、現在の対象の存在しか認めない現在主義(Presentism)、現在の対象に加えて過去や未来の対象の存在も同等に認める永久主義(Eternalism)、現在と過去の対象の存在は認めるが未来の対象の存在は認めない成長宇宙説(Growing Universe Theory)の三つである。この三者の間では熱心な論争が続いているものの、一般的には永久主義が優勢であると考えられている。しかし、発表者の見るところでは、現在主義と成長宇宙説に突きつけられる問題は、クワイン的なメタ存在論にもとづいている。また、クワイン的メタ存在論では永久主義は容易に定式化できるのに対し、現在主義と成長宇宙説はそうではない。これはクワイン的メタ存在論が、この論争の枠組みとして適切でないということを示していると考えられる。

そこで本発表では、三者の対立を捉える別のメタ存在論を提案する。このメタ存在論は、存在論的対立をメレオロジーに関する違いとみなす。簡単に述べると、現在主義は現在の対象しかメレオロジー的和を成さないという説とみなされる。同様に、永久主義は現在、過去、未来の対象はどれもメレオロジー的和を成すという説とみなされ、成長宇宙説は現在と過去の対象しかメレオロジー的和を成さないという説とみなされる。

これは奇妙なメタ存在論であり、従来の現在主義や成長宇宙説の支持者にとっては受け入れにくいかもしれない。しかし、このメタ存在論のもとでは、現在主義と成長ブロック説に突きつけられてきた問題は生じず、現在主義と成長宇宙説が永久主義と大きく変わらない仕方で定式化できる。よって、このメタ存在論をクワイン的メタ存在論の代わりに採用することは真剣に検討されるべきである。

11月24日(日)

《A会場》11:00-11:30

司会: 古田 智久(日本大学)

教室: F309

対象实在論を再評価する—自然主義的観点から—

石田 知子  
慶應義塾大学

科学的实在論論争とは、肉眼で観察できない理論的对象の实在性をめぐる議論であり、これまでに様々な立場が提案されてきた。その中の一つが、イアン・ハッキングやナンシー・カートライトに始まる対象实在論 (entity realism、以下 ER) である。一般的には、ER は操作可能な対象の实在性のみを認める立場だと理解されているが、この立場はさほど人気があるわけではない。ER を理論的に支えているのは「最もありうる原因への推論 (the inference to the most probable cause、以下 IPC)」と呼ばれる特別なタイプのアブダクションであるが、IPC によって ER を擁護する議論の説得性は弱いという批判が広く認められているからだ。

一方、科学的实在論論争において、「肉眼で観察可能な対象は实在する」ことは前提の一つとして認められている。確かに我々は、目の前にある対象の实在性を普段から疑ってはいないだろう。だが、「肉眼で観察可能な対象が实在する」とは、一体どのような事態なのだろうか？本発表では、この「肉眼で観察可能な対象は实在する」という前提が含意することをより明確にし、その結果を科学的实在論論争に反映させたい。そのために、まずは認知心理学などを参照しながら日常的な知覚のあり方を分析・検討する。そして、それらの結果をもとに、ER を再評価したい。

11 月 124 日 ( 日 )

《 B 会場》 10 : 00 - 10 : 30

司 会 : 松阪 陽一 ( 首都大学東京 )

教 室 : F309

### 態度報告文における de se / de re 様態の区別

森永 豊

東京大学

態度報告文の de se 様態とは、主体 H が態度報告文の表現する心的内容の帰属先であるとき、H 自身がこの心的内容を一人称で表現する場合のことである。John Perry (Perry1977, 1979)、David Lewis (Lewis 1979) などの考察に基づくいくつかの理由から、de se 様態は固有の論理形式をもつと考えられており、この見方に従ってその意味論が探求されてきた。ところが、最近は de se 様態が de re 様態の下位区分である可能性も探られている。これはつまり、de se 様態を持つと見られる報告文はすべて論理形式を共有する、ないしは、de re 様態と両立可能という主張である。de se 様態の報告文がもつ特異性にも関わらず、もし de se 様態が de re 様態の一種だとすれば、態度報告文の意味論がよりすっきりしたものとして提示できることになる。この主張の可能性を検討することが本発表の目的である。

検討のための材料として、以下に例示するゼロ代名詞を取り上げる。

(0) タロウは次の選挙で当選することを期待する

タロウの期待する内容は、タロウが次の選挙で当選することである。こうした観察から、明示的に文に現れることがないものの、態度の内容における主語を示すための代名詞的な働きをする構成要素が (0) にあると考えられて、それがゼロ代名詞と呼ばれる。ゼロ代名詞について知られる一見した特徴は、ゼロ代名詞を含むと考えられる態度報告文が de se の読みだけを許容し、de re の読みを受け付けないということである。したがってゼロ代名詞は、de se 様態が de re 様態の下位区分であるという主張を退けるひとつの根拠を提供する。

しかし、ゼロ代名詞は本当にこのような特徴をもつのだろうか。また、ゼロ代名詞は本当に存在するのだろうか。本発表では、態度報告文の de se 様態は de re 様態の下位分類であると主張している Philippe Schlenker (Schlenker 2003) と Emar Maier (Maier 2010, 2011) を取り上げて、彼らのゼロ代名詞の扱いを検討する。

11月124日(日)

《B会場》10:30-11:00

司会: 松阪 陽一 (首都大学東京)

教室: F309

### 固有名の不透明な現れと意味論的なふり

..... 上田 知夫  
..... ジャン・ニコ研究所  
.....

信念報告の引用句において、固有名が不透明に現れることがある。たとえば、太郎が「三遊亭圓生は東京出身だが、山崎松尾は大阪出身である」と主張するとしよう。そのとき、三遊亭圓生と山崎松尾は実際に同一人物であるにもかかわらず、(1)と(2)は真理値を異にし、異なる内容を表現しているように思われる。

(1) 太郎は、三遊亭圓生が東京出身だと信じる。

(2) 太郎は、山崎松尾が東京出身だと信じる。

この直観に反して、自然言語の標準的意味理論に従うと、(1)と(2)は同一の内容を表現し、常に真理値が一致すると予見される。その根拠は、標準的意味理論の一部をなす意味論的無謬性 (semantic innocence) というテーゼにある。このテーゼによれば、固有名の意味内容はその指示対象に尽きるので、「三遊亭圓生」と「山崎松尾」は同一の意味内容を表現する。

多くの論者は、意味論的無謬性と固有名の不透明な現われは両立不可能であると主張するが、本報告ではこの両者の両立可能性について検討する。本報告では特に、意味論的ふり (semantic pretense; Evans 1982; Walton 1990) をもちいる分析 (Crimmins 1998) に着目する。この分析によれば、「三遊亭圓生」が(1)の引用句内で不透明に現れるとき、発話者は信念保有者のふりをすることで冗長な存在者 (Schiffer 2003) を導入する。その結果、「三遊亭圓生」は「山崎松尾」と指示対象を異にし、(1)と(2)は内容を異にする信念報告になる。一方で、冗長的な存在者への指示によって、意味論的無謬性は維持される。

本報告では、この分析に対する反論を検討することを通じて、この分析を発展させることをめざす。その際に、とりわけ重要になるのは、信念報告の分析に真理条件的語用論の考え方 (Recanati 2000) を導入することにある。

11月124日(日)

《B会場》11:00-11:30

司会：松阪 陽一(首都大学東京)

教室：F309

### 帰属者/所持者の区別によるウィトゲンシュタインアスペクト論の分析

井澤 清一  
岩手県立大学

中山康雄は本大会(2007)において知識・信念の「所持者(bearers)」と「帰属者(attributers)」との区別を用いて知識の内在主義と外在主義との両立可能性を示す試みを行ったところであるが、本発表者としては同様の区別を用いてウィトゲンシュタインのアスペクト論(『哲学探究第二部』等での、「～を・・・として見る」「～を・・・と見なす」「～は今わたしにとって・・・である」等の概念分析・哲学的文法特性分析)を読み直す。

ウィトゲンシュタイン自身は当該アスペクト論を縷々展開するに当たって「所持者(bearers)/ 帰属者(attributers)」との文言は一切用いてはいないが、所持の主体と帰属の主体とが同一である場合(自己帰属)と異なる場合(他者・第三者による帰属)とを明らかに区別して論じているところであり、且つ当該二者が抱くアスペクト交代の可能性ないしアスペクト把握の複数性についての気づきの有無の差異についても同じくしているところである。これは次のように表記できる。

A:Bは～を・・・として見ている。

但し、「B」はアスペクトの所持者(把持者) bearer を、「A」はBに対してアスペクトを帰属させる者 attributer を、「A:」はAが次のことを主張するということを、各々指す。

本発表ではまず①AとBとが同一者である場合(一人称主語の帰属主張)と②同一者でない場合(三人称主語の帰属主張)に分け、更にアスペクト交代の可能性ないしアスペクト把握の複数性についての気づきを(ア)ABともに持っている場合、(イ)Aは持っているがBは持っていない場合、(ウ)Aは持っていないがBは持っている場合、(エ)ABともに持っていない場合、とに分け、更に「として見ている」の時制を現在・過去・未来に三別し、計24の場合についてウィトゲンシュタインの所論を検討する。

11 月 24 日 ( 日 )

《 B 会場》 11 : 30 - 12 : 00

司 会 : 松阪 陽一 ( 首都大学東京 )

教 室 : F309

### 「ゾンビ、概念、形而上学」

水本 正晴 前田 高弘

JAIST

発表者の 1 人はゾンビ論法に対するカウンターアーギュメントとして点滅論法と呼ぶものを提出した ( 水本 2006 ) 。それに対し三浦 ( 2009 ) は批判を展開したが、それは議論そのものをよく理解していないものであった ( 水本 2010 ) 。だが、三浦・柴田 ( 2011 ) は全く同じ誤解をそのまま残した再反論を試みている。そこでの彼らの反論は、またしてももっぱら 3 人称的考察に基づき「クオリアの点滅は気付くことができない」という ( 点滅論法自身が主張する ) ジレンマの一方の角を繰り返すだけのものであり、点滅論法の補強にこそなれ批判にはなり得ない。彼らは実質上、「そのような世界ではクオリアの点滅は気付かれ得ない ( もちろん ! ) 、ゆえに「クオリアの点滅は気付かれることが可能である」は偽である ( ! ? ) 」と論じているのだが、この「ゆえに」がまさに世界の整合性を前提する論点先取なのである ( 詳しくは、web 上の「死亡診断書を読まないゾンビたち」を参照 ) 。ジレンマのもう一方の角、すなわちクオリアの本質としての一人称的側面についての考察、そしてそれに基づく意味論的考察から成る議論への具体的に反論がない限り未だ点滅論法の掌の上なのであり、彼らが水本 ( 2010 ) の第 4 節を全く理解していないのは明らかであろう。

このことを我々は、同様の結論に至る Kirk ( 2006 ) の議論と関連させながらさらに具体的に論じ、さらに最近の分析形而上学を巡る議論、特に Williamson ( 2013 ) の主張を検討することで、その帰結について考察したい。特に、ゾンビ論者が「点滅しているが気付かれないクオリア」を当然として受け入れるとき、単に彼らは暗黙のうちに新たな概念を創造しているのであり、それゆえもはや形而上学的考察を行っていないのである。

したがって三浦・柴田にチャリティーを与えれば、結論は以下のような選言文になる。「ゾンビは不可能である、あるいはゾンビ論法から形而上学的帰結を導くことは不可能である。」

11月124日(日)

《C会場》10:30-11:00

司会: 松本 俊吉 (東海大学)

教室: F310

### 種についてのプロトタイプの思考と種問題

網谷 祐一

東京農業大学生物産業学部

種問題はしばしば、「種」についての、相互に対立する定義——生物学的種概念や系統学的種概念といった——の間の争いと考えられてきた。しかし生物学者の「種」という概念へのつきあい方を見ると、彼らはこれを定義を通じてだけでなく、定義を通さない仕方で理解していることが見て取れる。本発表では、生物学者が定義を通じないで「種」という概念を理解しているとき、しばしば認知心理学でいう「プロトタイプ」を通じて理解しているのだと主張する。この「プロトタイプ」のヴィークルになっているのが「よい種」(good species)という概念である。本発表ではこの「よい種」という語の用法を分析することによって、いかに生物学者が定義を経由せずに「種」という概念を理解し用いているかを議論する。そして、これによって、生物学者の「種」という概念へのつきあい方に見られる不思議な現象——たとえば「生物学者は種問題が未解決であることを十分知っているはずにもかかわらず、あたかも解決済みであるかのような態度をとる」といった——に分析の光をあてることができることを主張する。

11 月 124 日 ( 日 )

《 C 会場》 11 : 00 - 11 : 30

司 会 : 松本 俊吉 ( 東海大学 )

教 室 : F310

## 多様性の回復としての eco-evo-devo

吉田 善哉

京都大学

20 世紀の末頃から、生物の進化に関する研究と発生に関する研究は互いに密に連携する形で進められるようになり、それによりこれまで大きな成果を生んできた。この動きは一般に evo-devo (evolutionary developmental biology (進化発生学,あるいは進化発生生物学) の略) と呼ばれている。さらに近年、これに続くものとして、eco-evo-devo という新たな枠組みが一部の生物学者によって推進されている (e.g., Gilbert and Epel [2009]2012)。ここで新たに加えられた eco とは ecology (生態学) から取られたもので、つまり eco-evo-devo とは、進化研究と発生研究の連携である evo-devo にさらに生態学を組み合わせたものである。

本稿で考察するのは、この eco-evo-devo という枠組みが本当に evo-devo のさらなる発展であるといえるのか、という問いである。Eco-evo-devo を扱った教科書である Ecological Developmental Biology: Integrating epigenetics, medicine, and evolution (Gilbert and Epel [2009]2012, 邦題「生態進化発生学——エコ・エボ・デボの夜明け」) はこの問いに対し、肯定的な回答を提示しているように思われる。Gilbert と Epel のこのような見解に対し、本稿は歴史的な観点からの反論を試みる。現在の evo-devo においては発生遺伝学的な研究ばかりが強調されがちだが、evo-devo はその初期発展においては、非常に多様な概念やアプローチを含むものだった。そしてそこには生態学的な視点も含まれていたのである。初期 evo-devo が本来持っていた多様性を考慮に入れるならば、eco-evo-devo を evo-devo を越える革新的な枠組みとみなすことは適切ではない。それはむしろ、evo-devo という一つの分野の中での強調点の変化、あるいは一種のスローガンとして捉えられるべきである。

11 月 124 日 ( 日 )

《 C 会場》 11 : 30 - 12 : 00

司 会 : 松本 俊吉 ( 東海大学 )

教 室 : F310

# 「決定論と自由」問題の “ 解決 ” と情報の存在論 ( ? ) への道

古谷 公彦

( 財 ) 大島社会・文化研究所

かつて、市川浩は、生命の進化に関して、生体が高等になるにつれて、現前する自然環境の諸条件に癒着した関係から解放され、より可動的、より多義的で、現在のみならず、もはやない過去とまだない未来にかかわった関係を結ぶようになる、と述べ、この意味で生体の進化を、生体が、種に固有の自然的諸条件のア・プリオリな強制力から解放され、しだいに主体の自由を実現してゆく過程とみることもできるだろう、としていた。ここで述べられている自由という語は、単なる比喩的な使い方などではなく、「決定論と自由」問題における自由の意味での最重要の側面、つまり「今、ここ、この現実」から情報的に解き放たれ、物理的な 4 次元時空間連続体に拘束されることがない、という側面を的確にとらえている。翻って「心のはたらき」とされる記憶、予測、想像、抽象的思考について考えると、これらは決定論の前提となっている物理学的世界像には「収まりきれない」性質を備えていることがわかる。物理学描写が 4 次元時空間における時空連続体の形で行われるのに対して、記憶や予測は時間的連続を「跳び越えて」成立し、想像や思考は物理的時空間には「収まりきらずに跳び出している」からである。こうした時空連続体を「跳び越え」、そこに「収まりきらない」、記憶や想像、背景知識、さらに反実仮想的な推定、等々をもとに下される意志決定は、(情報的には)決定論的な物理的過程に拘束されることはなく、文字通りに「自由に」なされることになる。私たちは身体的には物理的 4 次元時空間に拘束されているが、情報一意味的には、もう一つの次元を切り開いて「今、ここ、この現実」の拘束を免れて自由を実現しているのである。そして、この情報一意味的に形成された意志は、大脳の運動野・運動神経による情報制御を通して随意運動の形で物理的に実現されることとなる。その意味で行為の自由もまた担保されることとなるのである。

11 月 124 日 ( 日 )

《 D 会場》 10 : 30 - 11 : 00

司 会 : 金子 洋之 ( 専修大学 )

教 室 : F311

## 双模倣と様相論理

細川 雄一郎

首都大学東京

「シミュレート ( 模擬 ) する」ということは今では日常的に解されている概念であるが、この概念を数学的に厳密に捉えたのが「双模倣 bisimulation」である。この概念は論理学 / コンピュータ科学 / 数学——特に様相論理 / オートマトン理論 / ( 非整礎 ) 集合論の境界面で起こった活発な行き来によって、1970 年代から 1980 年代にかけて形成されたが、現在最も先端かつ標準的な Blackburn, Rijke, Venema らの様相論理の教科書 (Modal Logic(2001)) では、実はこの概念が、様相論理を理解する上で最も中心的な役割を果たす意味論的概念として、はっきりと位置づけられている ( が、このことは国内では十分強調されていない )。

本発表は、こうして現代的に明らかとなっている双模倣と様相論理の不可分の関係を、「ヘネシー・ミルナーの定理」——双模倣関係にある二つの状態はまったく同じ様相論理式を充足し、しかもある一定の条件下では逆も成り立つ——及び「van Benthem の特徴付け定理」——双模倣関係の下で不変である一階述語論理式は、様相論理式に標準的な仕方で翻訳可能であり、逆に、様相論理式に標準的な仕方で翻訳可能な一階述語論理式は、双模倣関係の下で不変である——によって紹介し、その技術的・哲学的意義を考察する。

11 月 124 日 ( 日 )

《 D 会場》 11 : 00 - 11 : 30

司 会 : 金子 洋之 ( 専修大学 )

教 室 : F311

## 数学のユニヴァレントな基礎付けについて

三好 博之

京都産業大学理学部数理科学科

数学における高次元圏の重要性は 1970 年代および 80 年代に A. Grothendieck が既に強調していたが、1990 年代半ばに始まる弱高次元圏論の発展を背景に、2000 年代半ばになって V. Voevodsky と S. Awodey らによって独立に、数学のユニヴァレントな基礎付け (Univalent Foundation of Mathematics) と呼ばれる試みが始められた。これは、意味論的には数学的対象について高次元の圏論による意味付けが可能であるので幅広い数学に集合論より少ないコーディングで直接的に適用可能であり、また構文論的には内包的な Martin-Löf 型理論が自然に使用可能であることから、それに基づいた Coq や Agda といった定理検証系を使用して幅広い数学の直接的な証明を行うことが可能である、という特徴がある。本講演では、数学のユニヴァレントな基礎付けについて概説した後、上記の特徴が数学の哲学に与える影響について考察する。

11 月 24 日 ( 日 )

《 D 会場》 11 : 30 - 12 : 00

司 会 : 金子 洋之 ( 専修大学 )

教 室 : F311

### 認識様相・質的確率・超準確率

鈴木 聡

東京大学大学院人文社会系研究科研究員

Yalcin(8) は, Kratzer(1) のモデルが, 直観的に妥当であるいくつかの推論図式を妥当とせず, 直観的に非妥当であるいくつかの図式を妥当とすることを示した. Yalcin は, 確率測度に直接基づくモデルを採用する. しかし, Kratzer(2) が「我々の意味論的な知識によってだけでは, 数学者や科学者が用いる量的に正確な確率や効用という概念は与えられない」と述べるように, Yalcin のモデルは, 比較的認識様相のモデルとしては不自然であろう. 本発表の目的は, その言語のモデルが次の 4 つの長所を持つ新しい完全な論理様相 - 質的確率論理 (MQPL) — を提示することである.

- (i) 確率測度に直接には基づかず, 質的確率順序に基づくという意味で如上の Kratzer の直観を反映すること,
  - (ii) Yalcin の問題を引き起こさないこと,
  - (iii) 対象領域のサイズの制限を持たないこと,
  - (iv) コルモゴロフ確率論が扱えない 2 次元の幾何的確率等を超準確率を用いて扱えること.
- なお, 本発表で用いた測定理論に基づくモデル理論的方法は広汎な射程を持つことに注目されたい ((3),(4),(5), (6) および (7) 等を参照せよ.).

#### ●参考文献

- (1) Kratzer, A.: Modality. In: Semantics: An International Handbook of Contemporary Research. De Gruyter (1991).
- (2) Kratzer, A.: Modals and Conditionals. Oxford University Press (2012).
- (3) Suzuki, S.: Remarks on Decision-Theoretic Foundations of Doxastic and Epistemic Logic. Studies in Logic 6 (2013) 1--12.
- (4) Suzuki, S.: Measurement-Theoretic Foundations of Logic for Better Questions and Answers. In: Electronic Abstracts of BNLSP 13 (2013) Abstract No.9.
- (5) Suzuki, S.: Measurement-Theoretic Foundations of Preference Aggregation Logic for Weighted Utilitarianism. In: Proceedings of SOCREAL 2013. Forthcoming.
- (6) Suzuki, S.: Averages, Comparisons, Contextual Definitions and Meaningfulness. In: Proceedings of LENLS 10. Forthcoming.
- (7) Suzuki, S.: Measurement-Theoretic Foundations of Dynamic Epistemic Preference Logic. In: Formal Approaches to Semantics and Pragmatics. Springer. Forthcoming.
- (8) Yalcin, S.: Probability Operators. Philosophy Compass 5 (2010) 916--937.

11月24日(日)

《A会場》13:15 - 13:45

司 会：岡本 賢吾(首都大学東京)

教 室：F309

なぜ私(自己の意識)があると思うのか  
～私(自己の意識)のモデルについて、情報处理的アプローチ～

市瀬 規善

私(自己の意識)について、何なのかは科学的に扱うことはできず、考察は非常に難しい。そこで、何なのか、あるのかないのか、論ずるのではなく、なぜ私が(意識が)あると"思う"のか、について、たとえば情報処理系がそう思うようになるための条件は何なのかについて、考察する。また、これにより、今について、記憶について、われわれの思う"私"以外の"私"のありようについて、なども明確にする。

11月24日(日)

《A会場》13:45 - 14:15

司 会：岡本 賢吾 (首都大学東京)

教 室：F309

## 自我であることと人格であることとの関係について

福田 敦史

慶應義塾大学非常勤講師

本発表では、自我、人格 (person)、人間という概念について、一旦区別し、その上でこれらの概念を整理して関係のつけ直しを計るという仕方で、自我の有り様を取り上げる。

まず、自我であることを経験の主体であることとして扱いたい。経験の主体であるとは、何か経験が生起しているとみなせる時、この経験は誰にでもないものとして生起しているのではなく、必ず何ものかに経験が生起しているのであり、それは他でもないこの私に生起しているという素朴な意味としてである。そして経験の主体であるためには、自我は意識を有することが少なくとも必要であるとみなす。私たちは身体が関わる経験ばかりではなく、意識的・心的なだけの経験もするからである。このような意味で自我が経験の主体であるということは、自我はある経験が生じている時にその経験の主体として存在し、その経験が終われば自我＝経験の主体としては存在しなくなり、また別の経験が生じると、自我はまたその経験の主体として存在するということである。自我としての私は、その時その時の現在の経験の主体であるということである。しかし、私はその時その時の現在という短い幅の間だけ存在しているわけではない。私は過去生まれた時から現在に至るまで通時的・持続的に存在し続けてもいる。これは、人間としての私、あるいは人格としての私の存在の有り様である。私は現在自我であるわけだが、同様に人格でもあり人間でもある。自我としての私は、その都度その都度存在しているのだが、人格としての私は、あるいは、人間としての私は通時的に持続して存在しているのである（ここで、人格としての同一的持続性はほとんど動物主義的にあるいは自然主義的に前提されている）。いわゆる人格の同一性の問題は、自我としての私と、過去の人格としての私あるいは人間としての私との同一性の問題（というよりも関連づけの問題）であるということが示される。

11月24日(日)

《A会場》14:15 - 14:45

司会：岡本 賢吾 (首都大学東京)

教室：F309

アプリオリ・アポステリオリ区分の再検討  
(Re-articulating the A Priori-A Posteriori Distinction)

笠木雅史 (Masashi Kasaki)  
大阪大学 (Osaka University)

Carrie Ichikawa Jenkins  
University of British Columbia

本発表の目的は、アプリオリな知識に関する現在の代表的な論者である Albert Casullo のアプリオリ性の定義に対する批判を行い、それとは異なる定義を提出することである。Casullo (2012) は、伝統的哲学におけるアプリオリな知識の理解は以下のように定義されると主張し、それとは異なる定義を行う現代の論者（例えば、Jenkins (2008)）は、特定のパターンの誤りに陥っていると論じる。

(APW) S の p という態度がアプリオリであるのは、S の p という態度の保証が何らかの非経験的な起源 (source) に由来するときであり、かつそのときに限る。

(APW) は、非経験的な起源の積極的な関与がアプリオリ性に必要かつ十分だとする点で、経験的な起源の関与の不在のみが必要かつ十分だとする、以下の定義から区別される。

(APWN) S の p という態度がアプリオリであるのは、S の p という態度の保証が何らかの経験的な起源 (source) に由来しないときであり、かつそのときに限る。

また、(APW) は、「証拠」、「信頼性」などに訴える特定の知識の理論を前提とせず、「保証」という理論中立的な用語によってアプリオリ性を特徴づける点で、以下の定義とも区別される。

(APW') S の p という態度がアプリオリであるのは、S の p という態度の保証が何らかの非経験的な起源 (source) に由来する証拠から導かれるときであり、かつそのときに限る。

本発表は、まず Casullo の議論を検討し、幾つかの批判を行う。その批判は多岐に渡るが、本発表が最も重視するのは、以下の2つである。(1) (APWN) を理論中立的に擁護することは、極めて困難である。(2) 「証拠」は「p という態度の保証を認識論的に構成するもの」という理論中立的な意味で解釈することができ、(APW') も理論中立的でありうる。本発表は、こうした批判を展開した後、より適切な定義として以下を擁護する。

S の p という態度がアプリアリであるのは、S の p という態度の保証が経験によって構成されないときであり、かつそのときに限る。

#### 参考文献

Jenkins, Carrie I. (2008). *Grounding Concepts: An Empirical Basis for Arithmetical. Knowledge*. Oxford: Oxford University Press.

Casullo, Albert. (2012). "Articulating the A Priori-A Posteriori Distinction." In his *Essays on A Priori Knowledge and Justification*. Oxford: Oxford University Press: 289-328.

11月24日(日)

《B会場》13:15 - 13:45

司 会：丹治 信春(日本大学)

教 室：F101

### 透明性を超えて：いかにして自分自身の欲求を知るか

島村 修平

埼玉大学・ピッツバーグ大学

「私はケーキをもう一つ食べたいと思っている」。このように言うとき、普通私はいわゆる「三人称的証拠」——他人が同じ欲求を私に帰す際に依拠する証拠——に依拠してはいない。実際、上のような発話は、しばしばそうした証拠（例えば、メニューのケーキの欄を見ながら店員さんと呼び止める）の発生に先立ってなされる。しかし、通常の証拠に依らないというこの事実によって、当の発話が信憑性を欠くということはない。むしろ、事態は逆である。問題の発話は、私によって三人称的証拠に依らずになされたために、（その誠実性を疑わない限りで）かえって信頼の置けるものとみなされる。しかし、これらの観察が正しいとすると、一体いかにして私は自分の欲求について、通常の証拠に依らずしかし高い信頼性を伴って、何事かを述べるなどということができるのだろうか。

発表者は、この欲求の自己知の問いに対して、内観という特別な能力を指定せずに解答することを目指す。自己知の問題に対するこのような解答の試みは、信念や意図といった他の思考に関しては、「透明性説」という名の下にすでに盛んに追究されている。しかし、発表者の知る限り、欲求に関して満足のいく同種の説明を与えた研究はまだない。本発表でのこの課題への取り組みは、次の二段階からなる。まず2節において、予備的考察として、（欲求ではなく）意図の透明性に関するある有望な見解を概観する。次に3節で、この見解をベースとして、そこに手を加えていくことで、少なくとも意図の自己帰属と同程度の信頼性を持って、（意図をその一部として含む）より広範な欲求の自己帰属を説明しうる可能性を示す。また合わせて、欲求の自己知に対するこの説明が、信念や意図に対する透明性説とどの点で異なることになるのかという点にも触れたい。

11月24日(日)

《B会場》13:45-14:15

司会：丹治 信春(日本大学)

教室：F101

### 自己制御の喪失と二つのモデル

西堤 優  
東京大学

私たちはしばしば誘惑に負けて、自分の利益を損なうようなことを行ってしまう。たとえば、今書かなければならないメールがあるにもかかわらず、ついつい面白そうなネットニュースを次から次へと読んでしまい、メールを書く時間が無くなってしまう。なぜ私たちは誘惑に晒されると、しばしばそれに負けて、自己制御を失ってしまうのだろうか。

本発表では、自己制御の喪失がどのようにして生じるかを考察する。自己制御の喪失については、それが「自己資源 (self-resource)」の消耗によって起こるという「リソースモデル (resource model)」がある。これは、心理学において、意志力を行使して欲求を我慢すると、意志力が低下して自己制御の喪失が起こりやすいという事実が実験的に確認され、それを説明するために提唱されたモデルである。R. F. バウマイスターらによって提唱されたこのモデルによると、意志力の行使に必要な資源は、どんな意志力の行使にも用いられる共通の資源であり、誘惑に抗して行われるいかなる自己制御にもこの資源が用いられる。そしてこの共通の資源が何らかの原因によって消耗すると、自己制御の喪失が起こるのである。この自己資源を消耗した状態は、自己消耗 (ego-depletion) と呼ばれる。しかしこのリソースモデルに対しては、自己資源というような何か実体的な資源があるわけではなく、ある種の認知的な過程、すなわち動機や注意のシフトといった過程によって自己制御の喪失が起こるという説が反論として唱えられている。これは「プロセスモデル (process model)」と呼ばれる。

本発表では、リソースモデルとプロセスモデルを比較検討しつつ、どちらが自己制御の喪失のモデルとして適切であるかを考察する。

11月24日(日)

《B会場》14:15 - 14:45

司会：丹治 信春(日本大学)

教室：F101

### 行為の理由に関する反心理主義の検討

鈴木 雄大  
東京大学

近年、行為の理由に関する反心理主義という立場が注目を集めている。反心理主義は、行為の哲学において標準的な理論とされるデイヴィッドソン流の因果説と違って、行為の理由を行為者の心的状態（欲求、信念など）と見なさない。ある心的状態を  $M(P)$  とするとき（「 $P$ 」は心的状態の内容を表す）、心理主義が行為の理由を  $M(P)$  と考えるところで反心理主義は  $P$ こそが行為の理由だと考える。心的状態と身体運動の間には因果関係を想定しやすいため、心理主義をとれば因果説をとりやすい。他方、行為の理由を心的なものと考えないならば、因果説の是非について再考を迫られることになる。本発表の目的は、反心理主義が行為の理由を非心的なものとする諸根拠を検討し、できればそれを擁護することにある。

行為の理由を非心的なものとする際のポイントは、以下の諸点にある。行為の理由には行為を動機づけたり、行為を説明したりする役割の他に、行為を正当化するという規範的な役割があること。行為を動機づけたり説明したりする理由は、行為を正当化する理由と異なった種類の存在者ではなく、同じ種類の存在者である理由が異なった役割を果たすこと。そして、心的な存在者は行為を正当化することはできないこと。本発表は、反心理主義を提唱する J. Dancy や M. Alvarez の議論を参照しながら、以上の諸点を検討する。

反心理主義には、心理主義にはない諸問題も存在するゆえ、本発表の後半部ではそれらに対する解決案を提示する。その問題の大きなものは、行為者の信念が誤っているとき、 $P$ は成立していないのだから、 $P$ は行為の理由とはなりえないというものである（心理主義は  $M(P)$  を行為の理由とし、信念が偽でも  $M(P)$  は存在するゆえ、この問題が生じない）。発表者は行為の理由を目標という志向的对象と考えることによってこの問題を回避する点で、他の反心理主義者と意見を異にする。

11月24日(日)

《C会場》13:15 - 13:45

司会：出口 康夫(京都大学)

教室：F310

## デイヴィッドソンの外在主義における「緊張」について

木下 頌子  
慶應義塾大学大学院

H. パटनाム、T. バージらとともに、D. デイヴィッドソンは心的態度の内容（あるいは言葉の意味）に関して外在主義を採っている。本発表で問題にするのは、このデイヴィッドソンの外在主義について、E. ルポアと K. ラドウィッグが指摘した「緊張」関係である（Lepore & Ludwig Donald Davidson: Meaning, Truth, Language and Reality）。その「緊張」関係とは、発話や思考の内容の決定にとって、主体と環境との因果作用の歴史が重要であるかどうかという点について、デイヴィッドソンの主張に不整合があるというものである。

一方でデイヴィッドソンは、根源的解釈者の視点を方法論的な基礎とした意味理論を展開する。この理論によれば、話者の発話の内容は、解釈者が話者の外的環境を観察しつつ、「寛容の原則」に従ってその発話を解釈することによって決まる（例えば、“A Coherence Theory of Truth and Knowledge” (1983)）。ルポアとラドウィッグによれば、この立場は、内容や意味にとって歴史的要素は無関係であるという「共時的外在主義」に与する。ところが他方で、「スワンプマン」の思考実験において（“Knowing One's Own Mind” (1987)）、デイヴィッドソンは共時的外在主義に反することを主張する。そこで彼は、突如出現したデイヴィッドソンの物理的複製であるスワンプマンという存在を想定する。デイヴィッドソンによれば、スワンプマンはまるでわれわれと同じように話すように見えたとしても、適切な因果的相互作用の歴史をもっていないためにその発話は有意味でない。この立場は、主体と環境の因果的歴史を、意味の決定にとって本質的とみなす通時的外在主義への加担を示唆する。

ルポアとラドウィッグは、デイヴィッドソンのこうした態度を不整合であると批判する。というのも彼らによれば、スワンプマンの発話は、その因果的歴史がどうあれ解釈可能であり、根源的解釈者の視点を基礎とするデイヴィッドソンの立場からは有意味になるはずだからである。本発表では、この批判に対して応答し、デイヴィッドソンの立場は、むしろ通時的外在主義としてよりよく理解されることを主張したい。加えて、彼がスワンプマンの発話を無意味だと主張することは不整合ではないことも論じる。

11月24日(日)

《C会場》13:45 - 14:15

司会: 出口 康夫 (京都大学)

教室: F310

## Eliminativism of the phenomenology of hallucination

新川 拓哉

北海道大学

Recently, William Fish has proposed a disjunctivist theory of hallucination to address the argument from hallucination against naïve realism. His idea is to treat hallucination as a mental state which lacks phenomenal character. This eliminativist view seems to be more hopeful than the evidential disjunctivism endorsed by M. G. F. Martin, because unlike evidential disjunctivism, it can in principle provide an explanation of the introspective indiscriminability between veridical perception and hallucination. However, eliminativism faces a dilemma about introspection. It seems that we can become aware of a visual experience via introspection and refer to the experience as a reason for forming a relevant belief. Suppose that a visual experience lack phenomenology. Can we become aware of the non-phenomenal state via introspection? If the answer is in the affirmative, then a type of screening off problem arises: visual phenomenology is explanatorily redundant. If the answer is in the negative, then it seems to follow that we cannot become aware of a hallucinatory experience via introspection. This leads to a destructive consequence that it is impossible to make intelligible the introspective indiscriminability between veridical perception and hallucination. In order to dissolve this dilemma, eliminativists have to swallow a model of introspection on which the following two introspective practices are counted as essentially different: the practice of justification and the practice of discrimination. However, there is no good reason for making such a distinction. It is, therefore, concluded that eliminativism has a problem as to how to theorize introspection.

11月24日(日)

《C会場》14:15 - 14:45

司会：出口 康夫(京都大学)

教室：F310

The problem of stigmatization in treatment of soldiers and  
the cybertherapy as a treatment method for war-related PTSD

Georgieva Iva

東京大学大学院総合文化研究科科学史科学哲学研究室

Soldiers' PTSD is one of the most severe types of the post-traumatic stress disorder. Soldiers meet many difficulties in their service, some of them including injuring and killing enemies, seeing fellow soldiers injured or killed and being injured themselves. The gravity of the soldiers' service consists in one more specific which often is being overlooked: the fact that they are expected to be strong in physical, as well as in emotional or mental sense. Soldiers' image of "strong men" is necessary for them to keep their motivation and self-respect but when trying events shatter this image soldiers have to admit they are not much different from ordinary people who feel shocked by the reality of war.

We will explore how the soldier vulnerability plays role in the difficulty to accept killing enemies and we will argue why soldiers develop PTSD after combat experience. We will connect the image of the soldiers with the contradiction of their own reaction to killing and with this we will give one possible explanation of the onset of a severe PTSD as the war-related one.

Then, we will investigate in what way the cybertherapy could address this problem and will focus on the claim that soldier stigmatization arises from their preliminary image of "strong men" which is superficial. In order to meet the problems of stigmatization in war context we will discuss how treatment should handle the image of soldiers and how cybertherapy acts to help soldiers recover. We will argue that the effects of virtual environments on the human mind possesses a special power to help overcoming problems in real life and the exposure of soldiers in cybertherapy done in a gradual way could be a very appropriate way to match the needs of soldier PTSD.

Our final claim will be that stigmatization is a problem surrounding the war-related PTSD as well as other cases of the disorder and that the ways to handle this problem are a necessary task in front of researches on the subject.

11月24日(日)

《D会場》13:15 - 13:45

司会：三浦 俊彦(和洋女子大学)

教室：F311

## 哲学的美学と経験的美学

太田 陽

名古屋大学大学院情報科学研究科

本発表では、分析美学を一例とする哲学の一分野としての美学（哲学的美学）と、Gustav Theodor Fechnerの実験美学から近年の神経美学にいたる心理学・認知神経科学の一分野としての美学（経験的美学）の関係について考察する。

まず、1960年代に哲学的美学者 George Dickie から経験的美学にむけられた批判の妥当性を検討する。Dickie は、哲学的美学のあつかう問題を「音楽は意味を持つことができるのか」といった「論理的問題」と、「感性的経験 (aesthetic experience) とはどのようなものか」といった「心理的問題」の2種類に分類した上で、当時おこなわれていた経験的美学の研究はこれら2つの問題どちらの解決にも貢献しないとして、「心理学は美学と関係がない」と結論した。この Dickie による批判は、近年の経験的美学者からもたびたび言及され、現在も有効なもののみなされているが (Reber 2011 など)、本発表では、Dickie の主張を批判的に検討し、それが誤りであることを示す。

そのうえで、哲学的美学と経験的美学とはどのような協働関係をむすぶことができるのかを検討する。具体的には、(1) 経験的美学は、心理実験をおこない一般人の直観を証拠として哲学的な議論の裁定をくだすという点で、哲学的美学にたいして実験哲学的な貢献が可能であること。(2) 哲学的美学は、経験的美学の理論的前提を明らかにし方法論上の問題を分析するという点で、科学哲学的な貢献が可能であることを、最近の研究例を取り上げながら示す。

11月24日(日)

《D会場》13:45 - 14:15

司 会: 三浦 俊彦 (和洋女子大学)

教 室: F311

そこに『マクベス』はありますか — 反復可能な芸術作品の唯名論的理解に向けて

西條 玲奈

芸術作品の中には反復可能性 repeatability を特徴とするものがある。あるものが反復可能であるとは、複数の時空的位置に同じものが存在しうることだ。たとえば、同じシェイクスピアの『マクベス』がロンドンと東京でそれぞれ異なる演出で上演されたとする。これらは上演としては違うけれども同じ『マクベス』の上演であることには変わらない。演劇、音楽や写真といった反復可能性を特徴とする芸術作品には、一般に異なるパフォーマンスや事例が存在しうる。こうした特徴のゆえに、反復可能な芸術作品とそのパフォーマンスはタイプ・トークン関係としてしばしば理解される (cf. Dodd, 2000, 2004)。

本発表の目的は、こうしたタイプ説に抗し、芸術作品の唯名論を批判から擁護することにある。ここでいう唯名論とは、反復可能な特殊な存在者としての芸術作品を拒絶する立場である。むしろ、唯名論では、芸術作品が様々な時空的位置に生じうる具体的なパフォーマンスの集まりだとみなされる。唯名論の立場には、歴史的個体説 (cf. Rohrbaugh, 2003) や、芸術作品の延続説 (cf. Caplan and Matheson, 2006) などが提案されてきた。ここで擁護するのは、事物の持続は存在する各時点において時間的部分をもつことによるとみなす延続説である (cf. Lewis, 1986, Sider, 2001)。

ここで応じる芸術作品の唯名論に対する批判は二つある。一つは、性質の存在に関する「多にわたる一」問題のバリエーションである。これは異なるパフォーマンスが同じ作品に属することをどのように説明するかという問題である。もう一つは、作者の制作行為のパフォーマンスに対する存在論的優位を説明することである。もしも芸術作品がパフォーマンスの集まりならば、制作行為そのものは作品の一部として認められないことになるためだ。これらの批判に対して、前者については、時間的部分同士の類似性に基づく説明を、後者については作品の起源ととらえる説明を提供し応答を試みる。

11月24日(日)

《D会場》14:15 - 14:45

司 会: 三浦 俊彦 (和洋女子大学)

教 室: F311

## 時間論理における内的観点

北村 哲紀

首都大学東京人文科学研究科

本発表では、様相論理に特有の概念である「内的観点」について、様相論理の拡張である時間論理において、それがどのような含意を持つのかということを明らかにする。

簡単に述べると内的観点とは、以下の二点との関連で言われる。一つには、クリプキ意味論を用いることによって、様相論理の式はポイント(可能世界や時点など)に相対的に値踏みが行われること。二つには、様相演算子はあるポイントからアクセス可能なポイントを走査する働きをすること。こうしたことに内的観点があると言われる。

ところで、時間論理は、その開発の祖が哲学者であるという背景がある。時間論理開発の祖である A. プライアーは、彼が時制論理と呼ぶところの論理を開発する際に、哲学的考察を多く行っている。

その内のいくつかは、時間論理における内的観点とは何かを明らかにするヒントを少なくとも二つ与えてくれる。一つには、命題についての彼の考え方である。時制論理において、命題には時点ごとに真理値が変わる可能性がある。二つめは一つめと関係がある。二つめは、「現在」という概念についての彼の考え方である。彼は、他の論者のように、現在を何らかの存在者が持つ性質であるとは考えず(例えば、マクタガートのように出来事の持つ性質とは考えず)、現在とはものごとが起きる時点であると考えた。そのことが、彼の命題に対する考えと繋がる。彼によると、命題が表していることは、現在のことであり、無時間的なことがらではない。

この二つのことを基に考察を進めていくと次のことが明らかになる。つまり、時間論理における内的観点とは、命題の真偽を現在時点で値踏みをするということである。

この場合の「現在時点」について、さらに説明を加えなければならないが、それは発表のときにする。また、現代の応用論理の一つであるハイブリッド論理との関わりで、さらに説明をする予定である。